

氏名	ほり うち たか ゆき 堀 内 隆 行
----	------------------------

(論文内容の要旨)

南アフリカは、イギリス系入植者が一定の人口を有する一方、アフリカーナ(オランダ系入植者/ボーア人)がヨーロッパ系の多数派を占め、かつ先住民がいまなお他を圧倒する特異な地域である。また、こうした地域であるがゆえに、イギリス帝国の植民地支配の矛盾が先鋭的に顕在化している。「はじめに」で整理した研究史からもあきらかなように、南アフリカ史を理解するうえで重要な鍵をにぎるのは19世紀末－20世紀前半期であるが、近年の研究は南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティについて、他のエスニック・グループに対する開放性を過度に強調している。この点に留意しつつ、本論文では当時のアイデンティティの変容を辿る。

第1章では、19世紀末のケープ植民地におけるブリティッシュ・アイデンティティの形成過程を考察する。19世紀末ケープ植民地における人種差別の進展は、ヨーロッパ系を中心とするアイデンティティの展開とも軌を一にしていた。帝国支配の下に、あるいはイギリス系入植者の世界にアフリカーナを文化的に統合することは、1890－96年、植民地首相を務めたローズにとって重要な課題であった。ローズの庇護の下、数多くの歴史家、作家、建築家などが入植者の文化統合に邁進し、とくに歴史家シール、作家O・シュライナーはイギリス系とオランダ系をまとめて、「テュートン人」と呼んだ(第1節)。

また、こうしたヨーロッパ系を中心とするアイデンティティの展開と連動しつつ、世紀末ケープのブリティッシュ・アイデンティティにおいては、植民地が帝国に属しつつも本国と異なる側面を持つ、という認識も問題となりはじめた。この認識は、とくに2つのマショナランド(現ジンバブエ)旅行記を巡って高まる。本国の政治家R・S・チャーチルの旅行記は、オランダ系に対する蔑視、マショナランドに対する否定的評価を特徴とした。こうした旅行記の内容に対して、ケープでは反発の声が上がり、一連の反発と連動して、植民地人フィッツパトリックのもう1つの旅

行記が登場する。フィッツパトリックはチャーチルのボーア人蔑視に反発を示し、マショナランドに対しても、チャーチルとは対照的に肯定的に評価した。その農業ポピュリズムの表象は、多くが農村の住民であったアフリカーナも共有することとなる（第2節）。

更に、入植者の文化統合は、2つのマショナランド旅行記を連載したローズ傘下の『ケープ・アーガス』紙ばかりでなく、ショーがいまもなおリベラリズムの証左とする『ケープ・タイムズ』紙も担った。『タイムズ』紙は反帝国主義でも、またイギリス帝国と無縁でもない。その焦点は、1880年代末には移民の導入の議論に在り、90年代には「ケープからカイロへ」に伴う入植の議論に移った（第3節）。

このように、『アーガス』紙、『タイムズ』紙は入植者の文化統合と北方開発を支持したが、東ケープの『ポートエリザベス・テレグラフ』紙の様相は異なった。『テレグラフ』紙は19世紀末、東部の入植者にイギリス系の自覚を促し、当地建設の父祖である「1820年の入植者」を称揚した。また、「(イギリス系入植者)農民の新聞」としての自己認識を高め、各地の農民連盟の活動を報告し、進歩主義にもとづいて農業改良に関する情報を提供するとともに、アフリカーナのエスノ・ナショナリズムの進展に反発した。更に、こうしたブリティッシュ・アイデンティティ創出の焦点は、1880年代末には移民の導入、90年代には「ケープからカイロへ」政策に伴う入植各々の議論に在った。ローズとアフリカーナ同盟との協力は入植者の疎外感を一層深め、入植者が第2次南アフリカ戦争(1899－1902年)前夜の1890年代末、反同盟の進歩党に加わる一因となっている（第4節）。

世紀末ケープの文化統合は1910年の南アフリカ連邦結成にも影響を与えるが、その際に重要な役割を演じたのがカーティスなど11人の、いわゆるミルナー・キンダーガルテンである。第2章では、このグループの南アフリカ経験の歴史的意義について考察する。キンダーガルテンのメンバーが、白人を対象とする「シティズンシップ」(市民意識)の涵養に多大な関心を寄せていたことは、南アフリカ滞在のきわめて初期より確認できる。関心の一部は、在英時の経歴に起源を有したが、その対象が植民地白人に拡大したのは、南アフリカ景観の文学的表象「フェルトの

ロマンス」に接してのことである。この経緯を反映して、メンバーは、救貧と社会改革の対象としてボーア人労働者層を明確に措定した。しかし、(第2次南アフリカ戦争で荒廃した)トランスヴァール再建時の「シティズンシップ」涵養に際しては、エリート志向の限界も存在した(第1節)。

この矛盾を克服し、「シティズンシップ」観をクリアにすることは、メンバーにとって次の段階の問題となる。1905年の中国人労働者導入問題を1つの契機として、メンバーは、課題を「白人国家」の創出にシフトしていく。このシフトは、自治への関心の明確化、スタイル確立、あるいは対象拡大など、「シティズンシップ」涵養の深化とも対を成していた(第2節)。

帝国と「白人国家」の関係についてメンバーが認識を深めるのは、南アフリカ連邦結成への関与に際してである。このとき、メンバーは、ケープの「コロニアル・ナショナリズム」に直面する。19世紀末に起源を有する当地のナショナリズムは、帝国を上位に戴きつつ、植民地の独自性をも主張し、その信奉者はメンバー執筆の『セルボーン覚書』の批判者となった。この勢力への対応を通して、メンバーは、「シティズンシップ」涵養のスタイルを更に軌道修正した。その成果の一端は、『南アフリカの政府』の出版である(第3節)。

1910年以降の帝国再編への関与に際しても、「シティズンシップ」の涵養は、メンバーの活動において重要な意味を有した。そこには、南アフリカ経験との対応が確認できる。また、この「シティズンシップ」は、「ブリタニック(ブリティッシュ・コモンウェルス単位の)・シティズンシップ」とも言える(第4節)。

ところで、南アフリカ連邦結成に際して問題となったことの1つは、入植者の「和解」であった。第3章では、この「和解」が創出された過程を検討する。地域ごとに見ると、トランスヴァールは連邦結成論の起源としては重要であるが、「和解」の基盤とは言い難い。また、ナタール、オレンジも「和解」の基盤とは言い難い。3地域は対立の土壌を内包しており、「和解」を切実に必要としていた。他方、ケープは連邦結成論の起源とはなっていないが世紀末、入植者の文化統合を経験した。この経験は連邦結成にも影響を与えることとなる(第1節)。

南アフリカ連邦結成の際立つ特徴は、一部政治家の行動として進行したばかりではなく、一大「国民」運動としても展開したことである。連邦結成運動の立案と展開は総じて上からの動きであったが、連邦結成協会の日常的活動は講演会の開催、定例会での学習と討論など、会員の幅広い参加を前提としていた。また、運動の機関誌『ステイト』誌は、「国民」の「創造」が使命であることを明確に意識していた（第2節）。

『ステイト』誌は次のように、入植者の「和解」を喧伝した。まず、差異が大きい上陸以降の歴史と比較して、入植者共通の歴史的記憶として訴え易かった航海の歴史を強調した。また、ケープ建築はイギリス系かアフリカーナかを問わず、入植者全般にとって価値が高いとし、ローズ、「ケープからカイロへ」政策、開拓者精神などを礼賛した。「グレート・トレック」については、イギリス系とアフリカーナとの評価の決定的落差をいかに埋め、両者が受容し得る像をいかに提示するかが課題となった。アフリカ人の歴史については、一個の挿話、背景として矮小化した。第2次南アフリカ戦争など、入植者の内部対立を煽る素材を扱わない姿勢も明確である。更に、「コロニアル・ナショナリズム」を涵養する一方、言語問題を巡ってはアフリカーナ・ナショナリストと対立した。こうした対立は1914年、アフリカーナの蜂起に帰結することとなる（第3節）。

本論文の後半の2章では、南アフリカ史研究の基礎を築いたイギリス系の2人の歴史家の生涯と著述を手がかりとして、ブリティッシュ・リベラリズムの歴史的特質を考察する。まず、第4章では、リベラリズムの立場にたつ南アフリカ史叙述の確立者であるE・A・ウォーカーをとりあげる。20世紀半ばの南アフリカにおいては、イギリス系のリベラリズムがアフリカーナ・ナショナリズムと対抗するなかで力を得、排他性を深めた。このリベラリズムの確立に寄与したのが歴史家ウォーカーである。1911年、ケープタウンに来たウォーカーは、親ボーア的かつ人種主義的な歴史家シールの影響下で南アフリカ史の研究をはじめた。18年の第1次大戦終結以降、ウォーカーの活動として顕著なのはイギリス帝国の再編に関わるものであるが、同じ時期、南アフリカ国内の状況の変化に対しては疎外感を深めつつあった。30年

には「南アフリカにおけるフロンティアの伝統」と題して講演し、シールの親ボーア的な歴史叙述と一定の距離をおき、アフリカーナ・ナショナリストのコンサバティズムとレイシズムに対して否定的、かつ文明と野蛮との対比に基づく差別的な態度を垣間見せる。しかし、34年の『グレート・トレック』などにおいては、フロンティア学説を本格的に展開せず、親ボーア的なシールを踏襲し、アフリカーナにも一定の評価を得た。アフリカ人の歴史を軽視する点についても、ウォーカーはシールを踏襲するにとどまり、ヨーロッパ人が直接的に登場しないほぼ唯一の事例は、19世紀前半のズールー王シャカの征服活動を巡る箇所である（第1節）。

他方、19世紀末のケープ植民地を巡るリベラリズムの神話は、ウォーカーにとってもっとも重要な問題となった。世紀末ケープを巡る歴史研究は、南アフリカ連邦結成により植民地が消滅して10年余りが経過した1920年代以降本格化するが、この動きをリードしたのはウォーカーである。ケープ史に関する最初の著書である25年の『デ・フィリアース卿とその時代』は、メリマンなど植民地時代以来の政治家との交流に因るところが大きく、「和解」とホイッグ史観を基調としていた。しかし、アフリカーナ・ナショナリストが36年、アフリカ人の選挙権制限に動く、翌年の伝記『W・P・シュライナー — 南アフリカ人 —』などにおいては、南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティを全ての人種に公正なりベラリズムと性格規定し、その源流を世紀末ケープに見る姿勢を明確にする（第2節）。

1936年、『ケンブリッジ・イギリス帝国史第8巻 — 南アフリカ、ローデシア、保護領 —』に関わったことが契機となり、ウォーカーはケンブリッジ大学に異動した。以降、その関心はジェイムソン侵入事件(1895 — 96年、ローズがトランスヴァール共和国の転覆を企て失脚)、パクス・アメリカナの時代のイギリス帝国、アパルトヘイトの問題などに拡大する。ウォーカーに対する批判は1960年代よりはじまり、70年代初め以降本格化した。他方、南アフリカのイギリス系は60年代以降も排他性を深めていき、ブリティッシュ・アイデンティティとリベラリズムとの関わりは今日もなお、決して過去の問題とはなっていない（第3節）。

ウォーカー同様、南アフリカのブリティッシュ・リベラリズムの確立に寄与した

のが、第5章でとりあげる歴史家 W・M・マクミランである。1906年、オックスフォードを卒業したマクミランの関心は歴史より宗教と教育にあり、次いで救貧と社会改革の問題に移った。15年には東ケープ・グラハムズタウンで、同市のイギリス系「プア・ホワイト」問題が主題のパンフレット『ある非工業的南アフリカ都市の経済状況』を著している。また、17年にはヨハネスブルクの南アフリカ鉱山・技術専門学校に異動したが、教授就任講義「南アフリカにおける地方自治の位置」ではイギリス系よりアフリカーナの「プア・ホワイト」問題に関心が移っている。更に、19年の講演「南アフリカの農業問題とその歴史的進展」では農村の「プア・ホワイト」問題を主題とするようになった（第1節）。

他方、マクミランは1920年代以降、アフリカーナ・ナショナリズムと対峙するなかでスコットランド人ミッシヨナリ、カラード、アフリカ人などの問題に関心を移す。27年の『ケープの人種問題』では、19世紀前半を巡ってカラードに対するケープの（スコットランド人ミッシヨナリの）リベラリズムを礼賛しかつ、執筆当時のアフリカ人に対するアフリカーナ・ナショナリストのレイシズムを批判した。また、カラード、アフリカ人については、文明と野蛮との対比にもとづく差別的な態度も垣間見せた。1929年の『バントゥー、ボーア、ブリトン』では同じく19世紀前半を巡って、ボーア人のレイシズムを強調しかつ、アフリカ人の歴史に対する関心が低いことを露呈した。更に、こうした歴史に対する関心とともに、貧しいアフリカ人の現状に対する認識も進めていくが、1930年の『錯綜の南アフリカ』ではなお白人中心主義を脱していなかった（第2節）。

1933年以降、イギリスのアフリカ植民地政策に関与するようになって、南アフリカに対するマクミランの関心は続く。38年の『新興のアフリカ』などでは「文明化した」現地人エリートの重視、「原住民」の社会に対する無関心などが続いている。アフリカーナ・ナショナリズムとの対峙もなお重要であり、アフリカの問題は、「その進歩のみが南アフリカの姿勢を克服し得る」との確信ゆえに重要であるに過ぎなかった。また、59年の『自治への道』では当時勢いづいていた植民地ナショナリズムについてほとんど記述せず、最晩年の自伝は世紀末ケープのリベラリズムを

礼賛している（第3節）。

以上、本論文は、19世紀末から20世紀前半にかけての南アフリカにおけるブリティッシュ・アイデンティティの構築と変容の過程を、現地での統治経験や生活経験をもつイギリス系の知識人や行政官の言説の分析をつうじて、考察している。全体として本論文は、南アフリカにおけるブリティッシュ・アイデンティティが「白人」としてのアイデンティティ形成と不可分の関係にあり、イギリス帝国の植民地政策を支える意味を帯びていたことを明らかにした。本論文で示された南アフリカのイギリス系住民の自己認識の形成過程は、「ブリティッシュ・ワールド」全体の歴史的性格を理解するうえでも、重要な手がかりを与えるであろう。

氏 名	ほり うち たか ゆき 堀 内 隆 行
-----	------------------------

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、19世紀末から20世紀前半にかけての南アフリカにおけるイギリス系住民のアイデンティティの構造と、その構築の過程について、主として表象分析の手法を用いながら考察したものである。従来の南アフリカ史研究においては、先住民に対する白人による人種差別的分離政策（アパルトヘイト）の歴史的起源に大きな関心が向けられる一方、帝国支配の担い手であるイギリス系住民のアイデンティティ形成については本格的な研究がなされてこなかった。他方、イギリス帝国史研究においては、本国と植民地のイギリス人を結ぶブリティッシュ・アイデンティティへの関心が高まりをみせているが、こうした研究はしばしば他のエスニック・グループに対するブリティッシュ・ワールドの開放的性格を強調する傾向がある。論者は、このような近年の研究動向に批判的に向き合い、南アフリカにおけるブリティッシュ・アイデンティティが、アフリカ大陸におけるイギリス帝国の勢力圏の拡大と連動しながら構築され、人種差別的な白人意識の形成とも不可分の関係にあったことを、同時代の定期刊行物や、南アフリカでの生活経験をもつイギリス系歴史家の歴史叙述の分析をとおしてあきらかにしている。

本論文の考察はまず、19世紀末のケープ植民地における白人入植者の文化統合政策に向けられる。植民地政府は、イギリス系の文化人やメディアを動員して、イギリス系とオランダ系の住民のあいだに共通のアイデンティティを構築しようと試みた。入植者の文化統合を推進するこうした言説が、南アフリカから北方に向かうイギリス帝国の拡張政策（「ケープからカイロへ」政策）を支持する役割を担っていたという論者の指摘は、植民地におけるブリティッシュ・アイデンティティ構築の歴史的意味を理解するうえで重要である。1910年の南アフリカ連邦の結成もまた、先行するこうした白人社会の文化統合の経験をふまえて可能となったと論者は指摘する。

本論文は、南アフリカ連邦の成立にさいして重要な役割を演じた植民地行政官を



中心とするイギリス系エリート集団の役割にも、新たな角度から光をあてている。

「ミルナー・キンダーガルテン」と呼ばれるこの政策集団は、白人を対象とするシティズンシップ(市民意識)の涵養を重視しつつ、南アフリカにおける「白人国家」の創出への道筋を引いた。彼らの一部は、南アフリカでの経験を、その後のイギリス帝国の再編の過程で活用することになる。その意味で、南アフリカで彼らが構築しようとしたシティズンシップは、イギリス帝国全域にまたがる「ブリタニック・シティズンシップ」の形成につながるものであったと論者は指摘する。

本論文の後半の2章は、南アフリカ史研究の基礎を築いたイギリス系の2人の歴史家、E・A・ウォーカーとW・M・マクミランの経歴と著述を批判的に検討し、歴史研究とブリティッシュ・リベラリズムとの関係を探っている。ウォーカーは、南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティをすべての人種に公正なりベラリズムと規定し、その源流を世紀末のケープ植民地にみいだす歴史像を構築した。これに対してマクミランは、アフリカーナ(オランダ系住民)の人種差別的な姿勢を批判した歴史家として知られるが、論者は、そのマクミランにおいてもアフリカの先住民の状況や植民地ナショナリズムに対する関心は低く、晩年には世紀末ケープのリベラリズムを称賛する立場にたったことを指摘する。以上の考察は、南アフリカを対象とするイギリス系歴史家の研究の出発点が、イギリスによる植民地支配をリベラリズムの立場から正当化する主張と不可分の関係にあったことを明らかにしたものだといえよう。

すでに述べたように、本論文では、主として出版物に現れた言説を表象として分析する手法が採用されているが、そのような言説が生みだされるメカニズム、言説の担い手たちのあいだに働く権力関係、彼らの植民地体験の内実などは、分析の対象に含まれていない。このため、本論文の考察がときとして表層的な印象を与えることは否定できない。この点は、論者の今後の課題として残されるであろう。とはいえ、植民地におけるブリティッシュ・アイデンティティの構造を批判的に究明した本論文の全体としての意義がそれによって損なわれるわけではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるも

のと認められる。なお、2009年2月20日、調査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。